

見たものは誰もおらず、神は何か他のものによって譬える他には語りえないからである。

隠喩あるいはそれを構成要素とする譬話は、あることに従来そのことには述語付けられない述語を付与することによって、その述語の新しい意味すなわちあることの隠された属性を発見する試みである。言い換えれば隠喩あるいは譬話は、あることに従来そのこととは異なる範疇に属する属性を見出す試みに他ならない。言うまでもなくこの隠喩理解は、ポール・リクールによる「生きた隠喩」の理解である。

したがって隠喩は、現前する述語の背後に隠された新しい属性を発見する試みなのであるから、現前の背後に隠された新しい真理を顕わにするプラトン以来の形而上学と軌を一にする。

「隠喩的なもの *métaphorique* は形而上学 *métaphysique* の内側にしか存在しない」のである。

しかし隠喩は、あることに異なる範疇の属性を付与する試みなのであるから、差異性と同一性を共に保持せねばならない。ジャック・デリダの言うような階層秩序的二項対立すなわち差異性のみではあることに属性を付与することにはならず、逆に現前と真理の同一性のみではそもそも隠喩にならない。それゆえ隠喩的なものすなわちプラトンの形而上学に対するデリダの批判は必ずしも適切でない。

近代においてプラトンの形而上学はデカルトの数学に譬えられる。何故ならデカルトの数学は、現前する代数方程式の隠された意味として幾何図形という新しい属性を発見する試みだからである。現前する代数は真の属性としての幾何の隠喩なのである。

ある。

デカルトの近代は二一世紀の現代もなお未完であり続けている。現代の最先端の数学である代数幾何において、アンドレ・ヴェイユはイデアルという現前する代数の隠された新しい意味として代数多様体という幾何を見出し、さらにアレクサンドル・グロタンディークは可換環という隠喩の真の属性としてスキーム *scheme* を顕わにした。隠喩は現代数学さらには現代科学を革新し続けるモデルに他ならない。

私の数理神学という試みも、たとえば位相空間という数学を神の隠喩として考える試みの他ではない。神を位相空間であると述語付けることによって、位相空間の新たな意味を発見し神の隠された属性を顕わにする試み、そのことによって神の愛あるいは共苦 *compassion* とは何かへのより一貫した深い理解に導かれる試み、それが数理神学である。数理神学は、現代人に理解可能な言葉としての数学によって語られた、神の新しい譬話なのである。

境界の脱構築

——「生物学的統制の時代」におけるキリスト教——

金 承 哲

ロスリン研究所によって生まれた「クローン羊ドリー」(一九九七年) が引き起こした神学的・倫理的論争の要諦は、単に

パネル

ヒトクロノンの是非をめぐる甲論乙駁の次元を遙かに超え、人間の自己についての理解に新たな問いを投げかけている。そうした問いかけには、人間の自己と他者の間の境界についての問いを始め、人間と自然の間の境界、さらには、人間と神の間の境界についての問いが含まれている。「倫理」(ethics)とはこうした「境界」(ethos)をめぐる議論であるということを考えてみると、遺伝子工学的試みが倫理的議論を伴うことは当然であろう。「エトス」とは、「住み慣れた場所や居住地」(an accustomed place or habitation) (Webster) を意味し、さらには、そうした人間の住める「居住地」とそれを超える未知のところとの「境界」をも含意するのである。

遺伝子工学的試みは、たとえ「遺伝子決定論」という素朴な誤謬には陥らないとしても、人間のアイデンティティを人間の遺伝子的状態によつて解き明かそうとすることによつて、人間と他の生命体の間に連続性を強調している。(T・ペータースによると、「遺伝子決定論」には概ね「プロメテウスの決定論」と「傀儡的決定論」がある。) 人間の本質を握っていると判断される遺伝子の操作可能性は、人間のアイデンティティは「脱中心化する」(de-centering) アイデンティティであり、人間の自己という認識は、遺伝子の進化の中で形成された偶然的なものであるということを明らかにする。人間の自己は、「打ち砕かれた自己」(the shattered self) である(ピエール・バルデイ)。

昨今の遺伝子工学が唱えるこうした人間理解は、宇宙の中心的存在としての人間を脱構築してきた近代以来の思想的流れの

極めとして考えてもよいだろう。こうした思想の流れは、もちろん神を實在の中心から押し出そうとする試みと同時的に行なわれてきた。

神による創造と、また、神による「創造の秩序」を實在理解の基本としているキリスト教世界においては、遺伝子工学が提起するこうした問題は極めて深刻に受けとめられている。キリスト教においては、こうした倫理的議論が「神を演じる」(Playing God) という観念を中心に行なわれているが、そうした議論は極めて錯綜していると言わざるを得ない。

「神を演じる」とは一般的には、人間が神の主権領域としての自然に介入したり、医者が患者の生殺与奪権を握ることへの批判を指し示す概念であり、さらには、遺伝的増進のように人間の生命に深く関与することを阻止しようとする際に用いられる概念である。「神を演じる」とは、思想的には「自然の梯子」という概念にまでさかのぼる。すなわち、自然には神によつて定められた秩序があり、それを人間が人為的に変更しようとする一切の営みを批判し阻止しようとする意図をもつ概念である。一言で言うならば、「神を演じる」とは、人間と神の間の「境界」を不敬に侵害しようとするものと判断される一切の行為への警告として働くのである。

遺伝子についての研究は、自己と他者、人間と自然、人間と神の間の境界を脱構築することによつて、人間に新しい自己理解を求めている。キリスト教神学と倫理には、これらのことについて如何に応えることができるのかが問われているのである。